

(福祉) 六ツ美北部小学校 6年

ともに生きる社会を目指し、はじめの一步を踏み出そう

5月～2月(50時間)

1 ねらい

- ・障がい者の方の体験談や岡崎市福祉課職員さんに話を聞くことにより、福祉について関心を持ち、調べようとする事ができる。
- ・福祉実践教室の体験を通して、相手の立場になることで、思いやる心を培うことができる。
- ・ふれあい交流体験活動の場を2回設定することで、「ともに生きる社会」のあり方を理解し、自分のできることを実行しようという気持ちをもつことができる。

2 実践の概要

5月	視覚障がい者の方に話を聞こう	・福祉に関心をもつ。 ・福祉とは何かを調べ、考える。
6月	福祉実践教室で体験しよう	・疑似体験(高齢者・車椅子・視覚障がい者ガイド)を行う。 ・点字について学ぶ。
9月	認知症について知ろう	・認知症の話聞き、実情を知る。
10月	ふれあい体験活動の計画を立てよう	・幼児、高齢者、障がい者とふれあう計画を立てる。
11月	ふれあい体験活動をしよう	・保育園、高齢者施設に出かけ、交流する。 ・障がい者を学校に招き、交流する。
1月	ふれあい体験活動パートIIをしよう	・1回目の活動の反省を生かし、計画・準備し、交流をする。
2月	福祉についてまとめよう	・自分の活動してきた「はじめの一步」を振り返り、今後歩むべき道を考える。

(1) 視覚障がい者の話を聞こう

子供たちに、福祉に目を向けさせるための導入として、30歳代で病気のために目が見えなくなった方の話を聞くことを考えた。徐々に見えなくなっていくときに前向きに考えて準備していたことや、目が見えなくなった今、楽しく趣味に生きていることなど、前向きな話を中心に話していただいた。

話を聞く以前の子供たちは、「目が見えなくてかわいそう。」という気持ちでいたようだが、「自分でできることをやろうとがんばっている。私も見習いたい。」と反対に勇気ももらい、「自分たちのできることはないか。」と考えられるようになった。



(2) 福祉実践教室で体験しよう

障がい者や高齢者について、さらに理解をしてほしいと考え、疑似体験を行った。



高齢者疑似体験



視覚障がい者ガイド



車椅子体験



点字

体験後、子供たちは、次のような感想をもった。

「体が重たくなることは知っていたけれど、まさか、あれほどつらいなんてびっくりした。高齢者の人がいたら、荷物をもってあげたい。(高齢者疑似体験)」、「アイマスクをして階段を下りたとき、このへんで終わりかな、と思ってとても怖かった。(視覚障がいガイド)」、「少しの段差が大きな段差に感じ、車椅子の人は、大きな不安と恐怖を感じながら乗っていることが分かった。(車椅子体験)」、「目の見えない人には、とても大切なものなので、ぼくも覚えたいと思った。(点字)」

体験後の感想交流では、「自分たちにできることはないのか」とさらに活動への意欲が高まった。

(3)ふれあい交流体験活動しよう

①みんなで楽しんで何かを学ぼう (ふれあい交流体験活動パートⅠ)

高齢者福祉施設、保育園2か所、障がい者福祉施設の4か所にお願ひし、ふれあい交流体験活動を行った。「高齢者」、「園児」、「障がい者」から、交流したい希望を取り、学年を4つのグループに分け、計画・準備をした。高齢者福祉施設、保育園2か所は出かけ、障がい者福祉施設の方々は学校に出向いてくださり、交流活動を行った



高齢者福祉施設



保育園 A



保育園 B



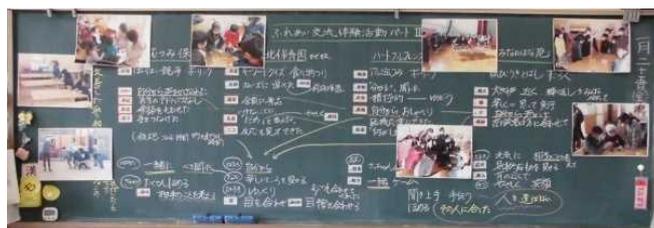
学校 (障がい者福祉施設の方)

交流後、学級でどんな体験をしてきたのか報告会を行い、さらに、そのときに学んだことや感じたこととの関わり合いの場も設定した。すると、「緊張して、言いたいことも言えなかった。」と反省する内容や「ゴールしたときのうれしそうな笑顔が、とても心に残っている。」など、ふれあって得た気持ちを伝え合うことができた。また、2回目の交流では、「もっともっと笑顔を増やしたい」と目標ができた。

②もっともっと笑顔を増やそう (ふれあい交流活動パートⅡ)

交流活動2回目であるため、子供たちは、「さらに楽しもう」と、はりきって計画し、準備をした。

ふれあい交流活動後の学級での話し合いの最後には、「人を選ばず、どんな人にも優しく接しよう」という気持ちを高めることができた。



3 実践を振り返って

導入として、視覚障がい者の方にお話をさせていただきことは、子供たちが福祉に関心をもつきっかけとしてとてもよかったと考える。また、福祉実践教室で、高齢者や視覚障がい者の体験をして、気持ちに添えたのではないかと子供たちのノートの言葉から感じ取れた。

ふれあい交流体験活動においては、1回の交流だけではなく、2回目を行ったことにより、子供たちは以前より、相手に寄り添い、相手のことを考えて言葉をかけたり、行動したりすることができたように思う。反省点は、準備の時間を十分に確保できなかったことである。子供たちが、一緒に楽しみたいと真剣に考えて小道具を作っていたが、持ち帰れるものは家で作ったり、大きなものは授業後に残って制作したりすることになってしまった。

また、4か所の施設にお願ひすることで、日程があわず、調整に苦労した。しかし、学校の願ひを聞いて、体験の場を提供して下さった施設の方々のおかげで、身になる学びとなり、感謝している。